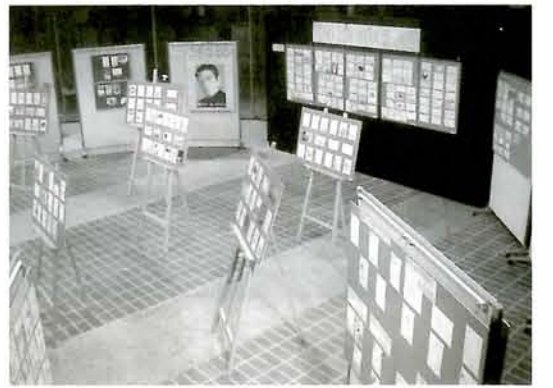


盛会 100万人の年賀状展

県内のゆるキャラからも



1月10日から2月11日まで、恒例となった新春ロビー展「100万人の年賀状展」(仙台文学館主催、仙台文学館友の会共催)を開催した。今年で13回目。

今年は約500通の作品が寄せられた。個人での応募のほか、絵手紙サークルや市内中学校など団体での応募もあり、台原中学校のみならずからは、千支の羊の毛を、綿やフェルトなどを用いて表現したユニークな作品も多かった。また、介護老人福祉施設の皆さんで、25枚のハガキ

私と郷土と文学 ⑤

昨年末、空き家になった実家の中を整理し始めた。もとはといえは亡くなった両親の所有物が大半で、次から次へと出てくる。思い切って捨てればよいのだが、これがそうかんたんにはいかない。台所を整理しにかかったときのことである。新聞紙に包まれた大きな帆立の貝殻を見つけた。この帆立の貝殻で、津軽出身の母親がつくってくれた「卵味噌」をよくご飯とあえ食べたものだった。忘れられない「おふくろの味」である。

津軽特有のこの「卵味噌」。実は太宰治の作品で紹介されている。太宰治は戦時中、帰郷したおりに三週間ほどだけ、津軽を旅行している。そのときの体験に基づいて書かれた作品が「津軽」。本品の中に蟹田という所が出てくるが、ここで「卵味噌」のことを、「貝の鍋を使ひ、

捨てられない帆立の貝殻

味噌に鰯節をけづつて入れて煮て、それに鶏卵を落して食べる原始的な料理であるが、これは実は病人の食べるものなのである」と説明する。当時、鶏卵は値段が高く、めつたに食べられなかったようだ。

帆立の貝殻あつてこそその「卵味噌」。見つけた貝殻はおいそれと捨てられはしない。断捨離も進まない訳だ。ちなみに私は大学時代を弘前で過ごしたが、学友の中には太宰治の「津軽」に魅かれ、はるばる遠い県外から入学して来た人がいた。その人は「津軽」を旅行ガイドブックのように持ち歩いていたのが印象的だった。(会員 其田敏美)

「文友の部屋」

オープンのご案内

次号より、会員からの声を掲載する「文友の部屋」という欄を設けます。会員の皆さまの声を寄せください。

友の会会員の文芸的感動を共有し、友の会の輪を広げましょう。

- ・おススメの文芸作品の紹介
- ・映画や演劇、朗読ステージなどを見た感想
- ・他県の文学館を訪れた思い出 など

ジャンルは問いません。

原稿は1500字以内で友の会事務局までお寄せ下さい。インシヤルでの投稿も可です。

友の会会員募集

現在、平成27年度の会員受付中です。まだ更新をされていない方の更新登録をお待ちしています。

友の会では常時会員を募集しています。友人や知人に参加を呼び掛け、会員の輪を広げましょう。入会についてのお問い合わせは、友の会事務局まで。

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第47号をお届けします。

▽先頃発表された芥川賞受賞作の小野正嗣「九年前の祈り」を読んだ。のたつつミミズのイメージ、祈りの場面、「手を放したらいかん」というイメージなどが胸を打つ作品だ。大分県出身の作者が依って立つ風土と国際性を溶け合わせた現代の精神風土にも関心を持った。(友)

▽今年の開花予想が発表された。仙台は4月11日、平年並なようだ。いつの間にか桜は近辺で観るのがよくなった。遠くの桜を観に行くのは思い出だけではないと思うようになった。しかし気になる花であることには変わらない。(宇)

▽阪神淡路大震災後に書かれた絵本「1000の風1000のチェロ」(いせひでこ)を読んだ後、その壮大なチェロの演奏を聴いてみたいものだとずっと思っていた。5月に、仙台で「復興支援1000人のチェロ演奏会」が開かれるという。どんな音になるのだろう。(佐)

文学の杜

仙台文学館 友の会会報

第47号

平成27年3月20日発行

4月25日から北杜夫の特別展

27年度展示 9月に「竹久夢二の世界」



北杜夫 (東北大学時代)

今年の仙台文学館は、特別展「北杜夫 ひとつとるマンボウの生涯」でスタートします。2011年に84歳で亡くなった作家・北杜夫は、「ひとつとるマンボウ」シリーズをはじめとする、ユーモアあふれる作品を多数残し、堅いイメージがつきまとう活字を親しみやすいものにし、多くの読者から愛されてきました。また「夜と霧の隅で」、「楡家の人びと」などの純文学作品においても、高い評価を得ており、現代の作家にも大きな影響を与えています。本展では、直筆の原稿やノート、日記、絵画などを通し、その独創性と優れたユーモアの感覚に迫り

イベントや講座も、小池光の短歌講座はじめ、短歌・俳句・川柳合同吟行会(こたばの祭典)、「仙台朗読祭」など例年通り開催します。「仙台文学館ゼミナール2015」は今年も充実した内容となっており、一足早く5月からは、俳句実作講座、朗読ワークショップ、現代詩実作講座がスタートします。

10月8日(木)には、イズミティ21で、こまつ座公演「國語元年」を予定していま



北杜夫筆「マンボウ」

今年度の仙台文学館は、特別展「北杜夫 ひとつとるマンボウの生涯」でスタートします。2011年に84歳で亡くなった作家・北杜夫は、「ひとつとるマンボウ」シリーズをはじめとする、ユーモアあふれる作品を多数残し、堅いイメージがつきまとう活字を親しみやすいものにし、多くの読者から愛されてきました。また「夜と霧の隅で」、「楡家の人びと」などの純文学作品においても、高い評価を得ており、現代の作家にも大きな影響を与えています。本展では、直筆の原稿やノート、日記、絵画などを通し、その独創性と優れたユーモアの感覚に迫り

- ### 仙台文学館平成27年度展示予定
- ◆特別展「北杜夫 ひとつとるマンボウの生涯」 4月25日(出)〜6月28日(日)
 - ◆夏休み子ども文学館えほんのひろば 7月17日(金)〜8月23日(日)
 - ◆特別展「竹久夢二の世界」 9月12日(出)〜11月8日(日)
 - ◆企画展「仙台の出版文化」 11月21日(出)〜1月24日(日)
 - ◆新春ロビー展「100万人の年賀状展」 1月10日(日)〜2月11日(木・祝)
 - ◆企画展「井上ひさし資料特展V 01.5」 2月6日(出)〜4月17日(日)
- *タイトル、会期は予定です

文友一滴

現代に生きる人々は過去の積み重ねの上で生活していることを承知している。過去のことは本で読んだり、テレビをみたりして、日常的に触れているのだが、時として生の過去に出くわすことがある。最近のことだが土橋通りの道路拡張工事で藩政時代の四ツ谷用水の石積と川底を突然目にするようになった。工事関係者の協力によって、丁寧に泥土が払われ、幅1.2m、深さ80cmの用水路跡が10mほどに渡って出現すると、20人ほどの見学者は感嘆の声を挙げて、凝視した。

「この辺は跳び越せなかつたつちや」 卒寿の先輩が言った。この支流は幅広く、流れが速かった、と懐かしそうに語った。四ツ谷用水は、400年前ほど前に作られ、1000年前までは仙台城下5万人の生活用水、防火用水などとして使われていたのである。延べ44kmにわたり滞ることなく、人工の清流を流した過去の知恵と技術を知り、仙台城下に水の音が満ち満ちていたことを想起することはここに生きる人々のところを豊かにするのではなからうか。さらに一歩進めて、その一部を開渠とし、過去の知恵を顕現することが出来れば市民の誇りとなるのではなからうか。

流れ行く大根の葉の早さかな 虚子(宇)



大佛次郎と大池唯雄

「こころの往復書簡」展を見て

1月下旬まで仙台文学館で開かれた大池唯雄と大佛次郎の往復書簡展は、2人の作家の手紙による心の交流が胸を打つ企画展だった。

昭和12年当時、大池は仙台在住の駆け出し作家、一方の大佛は鎌倉に住む流行作家。大佛は若い才能に目をつけ育ってほしいと願う一心から、大池を手紙で励ましアドバイスする。大池は大佛を師と仰いで創作に精進し、期待に応えようとす。展示会は、純粋な作家魂ともいべき2人の心の交流を書籍で実証しながら、見事なまでに浮かび上がらせた。

大佛は昭和12年4月、大池が大池に出した手紙だった。大佛は大池の書いた歴史小説「おらんだ楽兵」が雑誌の懸賞に入選したのを読んで感心。「しっかりと書いていい、人間もよく書けている、女に少し難がある、」などと率直な感想を伝えたのだ。

こうして始まった手紙のやり取りは2人の晩年まで32年間も続き。膨大な数の往復書簡が残された。その内容は2人の作家の心の軌跡を伝える貴重な文学遺産となった。手紙で大池は作家の卵から一人前の作家へと成長するまで精進することを誓い、大佛は創作を女性のお産に例えながら、いい作品を産むようにと大池を励ます。

2年後の昭和14年、大池は「秋田口の兄弟」と「鬼首」の2作品によって直木賞

友の会随想

仙台文学館友の会のメンバーとなつて十四年。本部の好企画のお蔭で東北各地の見学会に行かせてもらった。福島県いわき市に所在する草野心平記念文学館を最初に東北各県、あつという間に時が流れてしまった。文学館見学会の前に文学館にまつわる歴史的文化的事象を下調べした上に見学すると意外に立体的な感動を覚えることに気づいた。

個人的にも全国各地の文学館巡りをするようになった。

●松本清張記念館(北九州市小倉区) 小倉城。城の隣に記念館は所在。和風建築で立派な建物。実はこの小倉城は陸軍第十二師団がおかれていた。この司令

を授与された。それぞれ戊辰戦争と伊達政宗の父が殺害される戦役を扱った作品で、東北大学の史学科に学んだ大池の得意分野であった。直木賞受賞後は一人前の作家同志として互いに作品への感想を述べ合うなど、新たな交流が続く。大池は作家活動を続けることのプレッシャーを感じ、作品を産み続ける作家活動が並大抵ではないことを吐露した手紙も出している。大佛はその都度励ます。

展示会に接する以前から、大池唯雄や同時期並び称された濱田隼雄は仙台の地元作家としてとて思っていた。そのせいもあって今回の企画展はとても興味深く有意義なものとして拝見した。直木賞受



文学館巡り

友の会会員 後藤 文次

市立小樽文学館(小樽市)

●樋口一葉記念館(東京都台東区) 二十四歳で他界。都内を二十回余り転居。改装直前に訪問。一葉自筆の草稿が展示。字のうまさに驚嘆。水品のような字と私は思った。

年齢は数年違うが、石川啄木と北原白秋がこころ近辺を夜な夜な徘徊したとき

部に軍医総監(中将相当)の森鷗外が自宅より馬に乗って通勤。私は自宅を拝見。馬ならぬ徒歩で小倉城隣の清張記念館を見学した。記念館はさすがにスケールが大きく迫力そのもの。清張特有の甲高い声で「何事も疑ってかかる」という彼独特の小説への姿勢が伺われたのである。

れるが、貧たりとも青春のまつ只中であつたと想像される。 ●鎌倉文学館(鎌倉市) 言わずとした鎌倉文士の街。大佛次郎、川端康成、高見順、小林秀雄等、そうそうたる顔ぶれ。加賀百万石、田前田家の別邸、高台にあつて、眼下に相模湾の海の青さが眼にしみる。近くに住民は「心の休日」を楽しんでい

り、以前読んだことがあった。また大池晩年の長編小説「炎の時代」も河北新報に連載した戊辰戦争もの。これもとても面白く読んだ記憶があった。 大池についての読書体験はその程度だったが、大池は山本周五郎の「樫ノ木は残った」でも、伊達騒動の資料提供や現地案内など深く関わったことでも知られている。こうした知識を総動員しながら展示会に臨んだが、この作家をより詳しく知ることが出来た。関連イベントとして、大池の長男小池光仙台文学館長による「父 大池唯雄」や、大佛次郎研究会の手塚甫氏による「大佛次郎の素顔」という文学サロンも催された。



賞の「秋田口の兄弟」は受賞の1年半ほど前に河北新報に掲載された作品でもあり、東北大学の史学科に学んだ大池の得意分野であった。直木賞受賞後は一人前の作家同志として互いに作品への感想を述べ合うなど、新たな交流が続く。大池は作家活動を続けることのプレッシャーを感じ、作品を産み続ける作家活動が並大抵ではないことを吐露した手紙も出している。大佛はその都度励ます。

18回会 第18書

滑稽さの中に潜む哀しみ

小島信夫「アメリカン・スクール」

終戦後3年、進駐軍の自動車が出ひっきりなしに通るアスファルト道路に沿ってどこかわびしい日本人の集団が歩いていく。6キロ先のアメリカンスクール見学に向かう30人ばかりの英語教師一行であった。

瀟洒なアメリカンスクールは、広大な敷地の中に明るいガラス窓を輝かせて建っていた。1クラス20人、教師の給料は日本人教師の10倍だといふ。

「授業の参観など必要ない。ここで行われる教育が僕たちになんの参考になるのか。もう充分に分かった」と憤然とす

る男や「英語で話す別の人間になつてしまふ」と感じている主人公伊佐。アメリカンスクールの見学は、日本人の魂の在りようを確認させることにもなったのではなかったろうか。敗戦国ゆえの哀しみと痛みを伴って。

「この作品を読んで、戦争画を見ていような気がした」との言葉は、戦後の同時代を生きてきた人ならではの感想と思われた。

12月10日の読書会は新会員1名を迎えて、12名の出席であった。(佐)

19回会 第19書

夫婦のこころの陰影を描く

庄野潤三「プールサイド小景」

2月11日の読書会は11名の参加で行われた。

あらずじは世の中によくある話。「青木氏は使い込みで解雇される。青木夫人は優雅な生活が一変するの、たじろぎながら、夫からバーの女性の話、会社勤めのつらさなどを聞く。夫が外出し一人になると、夫人は急に夫の身に危険を感じる。一帰って来てくれさえすれば」と念じる

感想を大きくくりすると次のようになった。青木家の生活はこの時代にして

文学館企画展示

「俺達の国語ば可愛がれ」を見る

作家生活の生涯に渡ってことばを大切に「井上ひさし氏の作品には、特に方言に対する優しさと強さが見られる。そのことは客員教授としてオーストラリアで教鞭をとった時に「ゴトバの違いは単に発音や言葉の違いとどまらず、思想、価値観、人格の在り方へとつながっている。それは方言にも当てはまる」と話していることでもわかる。

今回の展示「井上ひさし、方言へのまなざし」では、そうした氏の基本姿勢が作品に表現されるまでの、丁寧な作業を見ることが出来る。各地方の方言辞典に引かれた何色ものマーカー、訂正され書き加えられる脚本の上の言葉の数々、「夢の痲」の舞台となった東北の小さな町(山形)の方言は、仙台のそれに似ていてよくわかり、つい笑ってしまった。

演劇のプロット、ポスターや舞台写真を見るのも楽しい。また出口に置かれた来館者のメッセージからは、方言と共に来館者の居住地域も知ることができ、良いアイデアだと思つた。(佐)

友の会読書会へどうぞ

本との出会いは楽しい。人との出会いは尚楽しい。そんな時間を過ごしませんか。

第20回読書会ご案内

☆日 時 4月8日(水) 14時~16時

☆場 所 仙台文学館講習室

☆読む本 庄野潤三「静物」

☆進め方 自分の感じたことを述べ合う。解説や議論をする場ではありません。気軽にご参加下さい。

☆申込み 友の会事務局まで (TEL 271-3020)

※参加者は会員に限らせていただきます。